

京都府十一年上四十四号
発行所：京都府立総合資料館

京鹿子



1月号

京鹿子祭特集号

鈴 鹿 呂 仁

拾 掬 集 その二十八



流 言 の 風 は 十 色 に 冬 ご も り
掛 け 樋 の 音 色 幽 け し 冬 ご も り
双 翼 の 翳 を 天 守 へ 青 鷹
初 冬 の 礫 は 眠 る 鴨 河 原
冬 蜂 の 己 が 世 世 と は 割 り 切 れ ず
枯 芝 の 真 ん 中 ロ ッ ク ン ロ ー ラ ー

人に棘いつはりに愛シクラメン
スケートのエッジよ風よ熱くなれ
煤逃げの口裏合はせ遊び紙
もみづれば実と虚の世の実相院
色変へぬ松へおろか拜む比翼句碑
幽居跡照り葉一つの高志かな
拜謁のお手植の松照紅葉
山茶花日和くもの子を呼び戻す

— 近 詠 —

鈴 鹿 仁



床もみぢ

床もみぢ 喝采となる 炎と艶

遠景のひとつに 冬野平らなる

京の北川の 流れも冬の音

— 追 懐 —

ねんねこの中のいのちは 風小僧
〔平成十二年作〕

御降りの滴露となりて 樹の尖り
〔平成十二年作〕

—
近 詠
—

和田 照海

名残の蚊

鱸 網 を 結 び 直 し て 十 三 夜

落 鮎 を い ち に ち 狙 ひ 鷺 の 鬱

猪 殖 え て 殺 生 話 神 の 島

柿 干 し て 峡 の 明 る き 日 暮 か な

絵 馬 殿 に 座 せ ば 畏 き 名 残 の 蚊



松本 鷹根

茶の花

金木犀散り放題を惜愛す

稔田の黄金ほめきに浮かされる

湖風ぐや遙か比良嶺に雁渡る

雁行や郷愁淡くそそりゆく

茶の花を賞で忙中の閑となす



近 詠

風のかゑ

遊龍の雲流れゆく秋夕べ

色鳥や水音を抱く風のかゑ

破れ蝶の息伝はりぬ肩の先

野紺菊摘む手に記憶よみがへる

月今宵ひとは宇宙に散骨す

塩貝 朱千

英華採集

栗の実やすとんと終る反抗期

岡山 佐藤 千恵

早いか遅いかの違いがあるものの誰にでもある子供の頃の反抗期。気が付かない内に終わっているのが一般的ではあるが、年齢が高くなるにつれて少し厄介になるケースが多いようである。掲句の「すとんと終る」の反抗期は、普通の反抗期と思われるが季語に「栗の実」を置いた事によって二、三人の子供を育てあげた作者が、それぞれの子供の頃の反抗期を思い出している、と想像すると楽しく鑑賞できる。栗の実が弾けた時が反抗期の終りである。

アルバムのやんちゃ散り散り蝨鳴けり 京都 山本 正

子供が大きくなりそして独立する。偶にしか家に戻らないのは母親には寂しく感じるものに違いない。そんな時は、小さい子供の頃のアルバムを引っ張り出しては繁々と眺めては感傷に浸るのである。偶さか開いたページには子供のやんちゃ盛りの写真が所狭しと並んでいるのが目に入る。今ではそれぞれ散り散りになっていく子供達へ重なるように蝨が鳴いている。

利き腕に荷の重すぎる下り籾 北桑田 中島 好江

下り籾は落ち鮎を捕らえるのに設ける籾。上流から下ってくる鮎を無傷で生け捕りできる仕掛けであり、鮎の習性を利用して考え出された人間の知恵でもある。しかし生きていく上で理解しながらもある種の不条理を覚え一つの罪の意識が芽生えるのである。その遣る瀬無さの思いを上五中七の措辞が言い得ている。

神麓集

冬菜漬 藤岡紫水

鈴の緒を風もてあそぶ神の留守
お茶の花ほろりと咲きてほろり散る
素つ気なきこの味が好き冬菜漬
小春日や反故は崩れず燃え尽す
鹿の眼に廻廊の赤炎え残る

読 初 沼田巴字

しぐるるや枯山水に一の音
白梅や一輪をもて王とせり
観世音の細きみ脚や初詣
拙守りし八十年や去年今年
読初や師の直伝の歎異抄

干柿 丸井巴水

風呂敷を柔らに結ぶ年の暮れ
踏まれたる落葉の悲鳴持ち帰る
歌碑一つ柚餅子の里の無名志士
齒応への返事またるうすら寒
干柿の種健在にして老いぬ

新 歳 植村蘇星

新歳や感謝一念空仰ぐ
東天の白み弥栄初明り
ホ句に生き生かさされ米寿初明り
先哲に習ひ歩まむ明の春
敷島の美しき言の葉嫁が君

神麓集

冬かげろふ

北川孝子

山裾の風やや老いて冬ごもり
冬かげろふ俳縁といふたからもの
草枯れて平穩すこしおそれけり
冬至来る一気走りに齡澄み
巻き戻しきかぬ思ひの冬至来る

秋の蝶

直江裕子

どう抱いてみても芒は芒かな
後書きを先に読む癖いわし雲
身のうちに負を抱へ見る曼珠沙華
もくろみは宙で微塵に秋の蝶
百万本のひまはりどこか兵に似て

不完全

高木晶子

首腦らの靴先尖りコスモス野
若沖の絵には戻れぬ青蠟螂
紅葉するどの一枚も不完全
小望月のいさゝか伸びる草の丈
秋天へ登る梯子の寸足りず

今年米

伊藤希眸

眞実は一つ石榴の割れ目かな
掬ふ掌のしろじろ光り今年米
曼珠沙華畦の十字を染め尽す
野分去る森はきらりと凝まりぬ
華洛遠しまだ生き足りぬ破芭蕉

神麓集

返書まだ 木戸渥子

萩焼の肌の渴きへ菊一輪
父母遠しほころび過ぎし彼岸花
草の絮ほどの付き合ひ返書まだ
秋風の鱭集めつつ三千歩
紅葉炎え城の武器庫を舐めてゐる

音 庄 奥田筆子

音庄の扉の重き文化の日
きりんはぬくき枯木と思ひ雀かな
園内を不敵な低空冬鴉
ゴリラ留守の寒い空間ゴムタイヤ
象の背のサバンナ飛地枯れてゐる

葛の花 井上菜摘子

葛咲いてまた深読みをしまふ
手鏡にわたしを消せば真葛原
道に迷へばぶつかつてくる葛の花
言ひ方を違へ野分のまんなか
申おでん表通りを来し人と

風の結び目 村田あを衣

竹林の風の結び目あきつかな
堂涼し天井龍になき死角
吾亦紅ほつほつ揺れて親ばなれ
星流るわたしの地図は未完成
秋の声ゆつくり回すけふの鍵

京鹿子大賞受賞作品

福知山市

西村 滋子

新緑や赤子ごくりと乳をほす

蚩袋ここよここよと灯をゆらす

やは肌の少女のまぶし薄暑かな

秋めきて埴輪大きく息を吸ふ

細くとも絆は強し鉄線花

みんみんや杜の塊さざなみす

花嵐をんなの嘘の量り売り

八月の空に兄の灯ゆれてゐる

ひと言を拭ひ切れずに梅雨の雨

知りそめし恋の色もて初もみぢ

落し文胸ざわめきて引き返す

八月や小さき石にも合掌す

信じたる人の迷走青すすき

鉛筆はBどんどん積る雪を搔く

毛糸編む晩年の夢ひろげつつ

初雲雀母を探しに雲を追ふ

向き合ひし少女の黙や青蜜柑

山寺の山に沿ひたる山葵沢

踏みつけし後のさびしさ初氷

残り鴨平行線の水脈を引き

影追ふもの何もなかりし破蓮

風呂敷に誓ひを包む野風呂の忌

年惜しむ胸の火種は秘めしまま

七人の敵なし過疎の一年生

寒林に見つめらる愚鈍なる午後

迷ひなくこの道一本花洛の忌

自由が好きはぐれ鴨とは呼ばないで

亀鳴くやあなたの声を探しゆく

陽の丘の古墳広がる犬ふぐり

母在すだけの菜の花灯りかな

野仏を背ナから洗ふ春しぐれ

花 洛 賞

京都市

加藤 翹 英

沖繩の壺の指跡夏の波
藤の実の青し情熱さましをり
夏落葉掃きて日常始まりぬ
やはらかき文字ばかり書き夜涼なり
縁切りの社晩夏の影ひとつ
橋わたる在在所の秋の風

池上へと攻めるやんまの怒り肩
式部の実恋は思案の水みくじ
遮断機のあがり遥かな諸紅葉
冬霧の蛤御門匿へる
消しゴムに消したる謎や古日記
同窓誌うしろから読む朧の夜
ごみ収集東風の残せし網畳む
養花天百円眼鏡の軽さかな
山藤や房ふくられます万の風

花 洛 賞

大阪市

本郷公子

再会や旅の終りの緑雨なる
青梅雨やうすれし夫の蔵書印
蓮崩る水よりうすき絹雲へ
十六夜や豆やはらかく煮上がりぬ
萩なごり妣の仕草と京ことば
屏風絵の余白雀の出入口

毛糸編む過去未来へと縁つなぐ
山眠る山の暦は伏せしまま
歌留多読むいつしか母の声となり
人日の何気に鳴るや古時計
大寒や逢ふ魔が時の猿ヶ辻
春光の鳥居神狐の見通す眼
咲き満つる桜の中にもてひとり
寂といふ墓碑にひとひら花さわぐ
掛香や旅より戻る君の部屋

青 秀 賞

福山市

北 村 梢

割 切 れ ぬ 数 は ど こ ま で 蟻 の 列
青 梅 雨 や 京 の 蕎 麦 屋 の 自 在 鉤
看 取 り 終 へ 父 の 日 の 身 の 置 き ど こ ろ
吉 兆 は い つ も 沖 か ら 蚩 烏 賊
ゆ る や か に 晩 年 を 着 る 白 紵
朝 ひ ら く 泰 山 木 は 神 の も の

無言には無言で添へり蛍の夜
紅小菼いくつこぼせば恋成就
紅き実の何たくらむや柘榴笑む
懐手老いてもいまだ見えぬもの
初旅や再発といふ火種持ち
背伸びしてまだ高くへと受験絵馬
羅漢笑む芽吹きを風を遊ばせて
看取りにも終る日のあり春の雨
地平まで菜の花いろの干拓地

募集大作賞

福山市 大塚文枝

冬の雁

迂闊にも君を花野に置いて来し
いなつるび永遠の眠りの傍らに
もう落ちぬ点滴真夜の雪催
今際の目ひとすじ涙シクラメン
死者と酌む熱爛のんど通らざる
骨壺の温みの記憶山眠る

生き下手の死に上手なり冬銀河
深眠りバナナに汚点増ゆる頃
変換キー死は詩と出でてポインセチア
沈黙もまた言葉なり玉子酒
石路日和上げてもらへぬ背のファスナー
右向けば右に椅子置く遅日かな
枢窓夫と目くばせ冬の雁
短日やことに淋しき膝頭
暖鳥ひとりの閨の無音かな

募集大作賞

福山市 北村 梢

まほろば

まほろばの大和は青田風の中
老鶯や遠まなざしの広目天
夏蝶をまとひて入りぬ浄瑠璃寺
西日にも耐へし千年踏まれ邪鬼
大きことししみじみ涼し盧舎那仏
みほとけの高さに泰山木ひらく

石仏もかくれごころに桐一葉
黒揚羽戒壇院へまぎれ込む
広目天火焰涼しく負ひ給ふ
堂と塔つなぐ静寂やしきぶの実
雲染めてはるかなる日の曼珠沙華
秋蝶となりけり此岸離れきて
ふり向かぬ淋しさに似て吾亦紅
日と月の菩薩かがよふ萩のころ
夕かなかな水田は塔の影沈め



京鹿子集

鈴鹿呂仁選

村と村繋ぎて霧の一揆かな

京田辺 山中志津子

吾亦紅の纏ふ暮色に安住す

冬隣る荷造りひもを買ひたして
更待月カッタグラスに身を崩す

城陽 鷺山 珀眉

彼岸花引き返せざる道の燃ゆ

露寒や山端に渡る風訛り

放浪記とどこどころで秋刀魚焼く

水鳥の水昏れ残す川中洲

実直な貌して奔放ねこじやらし

暮早しダリの時計の針うごく

結び目をほどけば傾る葛の秋

風船かづら一語にゆらり揺れはじむ

京都 片山 熙子

言ひ出せぬひとこと葡萄棚の下

秋水に朱色の似合ふ古寺の塔

青春は発見ばかり萩くれなぬ

思ひ出が割れさうあげびむらさきに

こぼれ萩あしたはきつと風になる

秋の蝶夕日抱きしめ去りがたし

ゆふやけを大きくカットして配信

コスモスの高さに街の暮れそめて

地球儀の海より野分あふれだす
福 山 亀井 福恵

群るるとも一本づつの曼珠沙華
桐一葉風を大きく見せにけり

言の葉を捨てて拾うて秋深む

芙蓉閉づ一日の風を抱きしまま



栗の実やすとんと終る反抗期
岡 山 佐藤 千恵

菊の香ののこる指先紅を引く

船笛や浜菊の白なほ白く

色鳥のまぎれこみたるちひろの絵

アルバムのやんちや散り散り螻蛄鳴けり
京 都 山本 正

ほとぼりを横たへ虫の闇浮かす

無駄のなき一語一音鉦叩

虫すだく見目も生れもこだはらず

利き腕に荷の重すぎる下り籾
北 桑 田 中島 好江

夕やみが迫りころりと秋の風

今日ひと日生きて湯舟にちちろ連れ

別れ蚊や手桶に水をなみなみと

山形なの柿選りし午後日本街

如意ヶ嶽火床近くに鹿群れて

異郷にて知人と出遇ふ秋の空

双葉から樹齡千年天高し

空清きオハイオブルー緑映ゆ

木の間から輝く空や風薫る

風はなく緑の森は輝けり

夕風やピタリと止まる世界あり

一雨きて一衣重ねる秋の暮

稲穂道西に向ひて波打ちぬ

公園に老来てゲーム天高し

秋風や余生球技の声高し

秋鯖のすしの料理はお手のもの

花蕎麦の白を重ねて咲きみだる

秋澄むや快癒の近き目覚めなる

今夕は皿をはみ出す秋刀魚食ふ

孫の為祈る平和や秋墓参

天高し旅の僧侶のスマホかな

銭湯を出れば満月瓦屋根

秋の夜裏路地の窓シヨパン漏れ

アリソナ 伊吹 之博

オハイオ 水谷 直子

酒 田 藤波 松山

渋 川 東 秋茄子

さいたま 神田 惣介